

近世小説とその挿絵

——『西鶴諸国はなし』の場合——

宗政五十緒

1

井原西鶴の浮世草子類の挿絵について、その基礎的な調査・研究は、水谷不倒氏の『古版小説挿絵史の研究』が詳しい。その調査・研究によると、西鶴本の挿絵の筆者は四分類できるといふ。その第一類は西鶴自筆、第二類は吉田半兵衛の筆、第三類は半兵衛の門人の二、三の者の筆、第四類は蒔絵師源三郎の筆である。

西鶴自筆の挿絵をもつ浮世草子は『好色一代男』・『好色二代男』・『西鶴諸国はなし』（外に『近代艶隠者』を水谷氏は掲げている）の三種で、これらは天和二年から貞享三年に至る、彼の浮世草子の初期に刊行された作品に限られている。

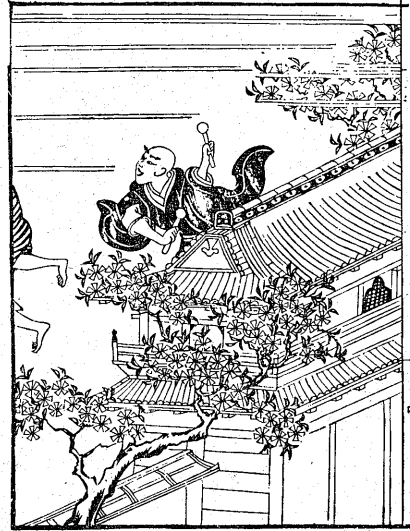
2

近世小説の作者と挿絵の筆者とが同一人である例としては、黄表紙の山東京伝や恋川春町などが恐らく代表例となるであろうが、西鶴もまたその例にあげられてしかるべき一人である。一般にこのような、作者が挿絵の筆者でもある、といった場合には、挿絵というもののもつ意味を、両者が別人である、といった場合とは異なって把握できることもあるのではなからうか。この点について、作者西鶴の自筆挿絵をもっている『西鶴諸国はなし』を例として少し述べてみたい。

3

まず、巻一の一「公事は破らずに勝つ」の挿絵である。この一篇の梗概を簡単に記しておく。

奈良、東大寺の宝物の太鼓を毎年、興福寺が法事に借りて使用していた。ある年、東大寺がこの太鼓を貸



『西鶴諸国はなし』巻1の1「公事は破らずに勝つ」の挿絵

さぬため法事に事欠き、興福寺側は衆徒・春日大社神主の添言をえて、やっと借り出し、法事を済ますことができた。その後、東大寺に太鼓を返却する時、太鼓の内側に「東大寺」と墨書してあった書付けを削り、更めて新しい墨で「東大寺」と書いて興福寺に返した。

翌年、興福寺から東大寺に使僧がゆき、「預けて置いた太鼓を取りに参った」というと、東大寺側が怒って、この使僧を打擲して帰した。

この事が訴訟になり、太鼓の内側を調べると、新しく削って「東大寺」と墨で書かれてあったので、奉行の判決は「たとえ興福寺側の仕業であったとしても、落度は東大寺側にある。古くからの書付けは不明である。今後は、興福寺の太鼓と取り決め、置き所は東大寺とする」ということで一件落着した。

この章の挿絵は見開き一丁、二ページで、右ページに楼門が描かれ、太鼓の撥を持った僧侶が一人躍動している。左ページには唐太鼓が描かれている。太鼓は七人の剃髪・有髪の屈強な若者たちで担がれ、太鼓の上に一人の僧侶が乗っている。太鼓の表側の皮には逆立ちした一匹の唐獅子が描かれている。この絵は場所を興福寺と設定して、太鼓をめぐる寺内の騒動のさまを示しているものと見てよい。

この挿絵の太鼓には唐獅子が描かれているが、このこと

についての説明、ないしは記述は本文には見えぬところである。

では、何故に太鼓に唐獅子が描かれているのであろうか。この疑問に私は、これはこの篇は次に掲出する、東大寺と興福寺との間の法具の貸借についての紛争を素材にしたゆえである、と考えるのである。事は中世末期成立の事典『塵添藻囊鈔』巻一九「興福寺事」の条に左の如く見える。

興福寺の維摩会に用いる如意は聖宝僧正の道具で、一面に三鈷杵を彫刻し、他の一面に五獅子を彫刻している。維摩会の講師はこの如意を執つて法事を行なう。しかし、聖宝僧正は東大寺の東南院を創建した人なので、この如意は興福寺にはなくて東大寺に置かれているのである。ある年、興福寺・東大寺間に事が起こつて、東大寺がこの如意を出さなかつたので、講会を行なうことができなかった。そこで興福寺の衆徒が朝廷に奏上して、朝廷が東大寺に勅を下して如意を出させ、法事を行なうことができた、という。本文を掲げる。

〔維摩会ニ〕捧グル所ノ如意ハ、聖宝僧正ノ道具ト云也。仍、彼ノ会ノ講師、必ズ此ノ如意ヲ執テ、演唱ニ応ズ。尊師東南院ヲ草創シ給フ故ニ此ノ五師子ノ如意東大寺ニアリ。然ニ両寺事有ル時、東大寺之ヲ出サズ、彼ノ如意無ケレバ講会ヲ闕ラク。之ニ依テ衆徒、

朝ニ奏ス。朝廷、東大寺ニ勅シテ如意ヲ出ス。法事ヲ行フ。秘重此ノ如シ。五師子ト云者、(元亨) 釈書ニ云、面ニ三鈷杵ヲ雕リ、背ニ五師子ヲ刻ム。是、顯密兼学ヲ表スル也ト云云。」

また、興福寺維摩会にこの如意を用い、この如意がなければ法会が行なわれないことは、近世の地誌にも見える。

『南都名所集』巻二「東南院」の条に、

「また、如意池・如意塚といふあり。聖宝尊師、五師子の如意を掘出したまひける跡とかや。この如意は興福寺維摩会の時出るなり。この如意なきときは此会おこなはざるよし、(元亨) 釈書に見えたり。水牛にて作るとかや。表に五師子、裏に独鈷あり。顯密の二教を表せるなり。」

とある。この独鈷は奈良の人たち、あるいは奈良を訪れた人たちには知られていた、由緒のある法具であつたのである。西鶴はその作品などから彼が屢々南都に遊んだであらうことが窺いうる。

『諸国はなし』の挿絵、太鼓の表に獅子が描かれてあつた理由がこれで判然とする。「公事は破らずに勝つ」と維摩会の如意との関係、後者が前者の素材であること、がこの挿絵を仲介として人は知ることができるのである。

このような一篇の素材、種というものは、いわば作者にとつて、彼の手の内、といつてよいであらう。こういつた作

者の手の内と、創られた作品との関係、いかえると、作者と作品との関係が、作者自筆の挿絵がある場合には、挿絵に注意することによって把握が可能なのがある。これは又、作者と画者とが別人であっても、両者の間に打合わせがあり、両者密なる場合には、右に準じたことが考えられるわけである。このことから、挿絵を通して逆に、作者と画者との関係を探ることが可能となってくる、ということも考えうるのである。

右は、素材、ないしは原拠、という、文学作品の形式面での趣向、あるいは作意に関係したものとして挿絵の意味を考えた一例である。

なお、参考までに、右の如意に関係する東大寺・興福寺紛争事件の記事を『南都年代記』から抜き出しておこう。

「(永仁三年) 自八月一日、去年分最勝会被_レ行_レ之、講師隆遍、依_二東大寺訴訟_一五獅子如意抑留之間、被_レ下_二長者宣於一乘院家_一、被_レ渡_二清水如意_一畢、仍略重論義疑第二重畢、此条頗有_二委曲_一、自九月十日、去年分維摩会始行_レ之、講師清憲、如意事子細同_二最勝会_一、同十六日申_レ剋、社頭御供所釜、同時乍_二一自要日切落畢_一、尤為_レ奇、当年分維摩会始行_レ之、講師顯観、如意事前、凡兩月大会東大寺依_レ不_二供奉_一珍事非、委細載_二三入会定一記_一畢、」



『西鶴諸国はなし』巻1の3「大晦日はあはぬ算用」の挿絵

次は、巻一の三「大晦日はあはぬ算用」の挿絵である。この一篇の梗概は――。

大晦日に義兄から小判十両を贈られた牢人原田内助は、同じ牢人仲間を呼んで酒宴を催す。訪れた七人の客に小判十両を見せ、宴、終わって取片付けようとす
るが、数えてみると小判が一両見当らない。ために、一座の者の生死にもかかわってくる。やがて、その一両は宵に、山芋の煮しめを入れて出した重箱の蓋の裏に付着して台所に下げられていたことを内助の内儀が見付け、一座落着した。(後略)

事は「品川の藤茶屋のあたりに棚借り」した牢人原田内助宅において起こる。この章の挿絵は見開き一丁、二ページ、内助宅を描き、左のページは小座敷で牢人風体の男たちの酒宴の様、小判が畳の上に散在し、五人の男が見える。右ページには渡り廊下、小判の付着した重箱の蓋を左手に持った女性――内助の内儀であろう――が小座敷の方に歩いている。小座敷には草花を描いた襖があり、鎗および長刀の類であろうか、四本の武器が左側の壁に掛けられている。廊下に、更に通じる渡り廊下、それは恐らく内の台所に通じるのであろう。表の座敷と内とが廊下で繋がれている居宅である。

だが、内助は本文によると「広き江戸にさへ住みかね」て品川に移居し、今は「朝の薪に事欠き、夕の油火をも見ず」という生活で、柴の戸も「くづれ次第」という悲惨さの毎日である。

本文から推測する内助の生活と、挿絵から看取する彼の生活とは少しく齟齬が存するように感じるのは私のみではあるまい。しかし、西鶴は武家の生活というものは、牢人して落ちぶれ、貧窮の中にあっても、かくのごときものであろうと想像していたのではなからうか。絵というものは確かに、絵そらごと、という語のあるごとく誇張・変型・虚構はしばしば存するが、それはそれなりに又、画者のもつ心情を表出しているものはずである。この章は江戸初期に時代を設定しているものごとくであるが、江戸初期の貧窮なる牢人の借宅にしてはいささか立派なる様子である。西鶴は武家の内情、私生活、というものを余りよくは知らなかったのではなからうか、と私は推測するのである。

一体、江戸時代は封建身分社会である。身分の相違する者の間では、表向の交際や公用の接触はあっても、相互に私人として、相手方の家の内々までも立入っての交際はほとんどなかったものと基本的には考えてしかるべきであらう。ただ、法体の人とか芸文の徒は、そうした身分の差を超越した内の交際も時には可能であつたらう。しかし、西

鶴は商人である庶民の身分である。法体して俳諧点者となつてはいても、武士である土人の身分の人々との交際は、極めて親しい間柄の者があれば別として、内々にまで深く立入ることは極めて少なかったと考えてよい、と私は思う。このことは、西鶴の武家物と称される浮世草子類を読んでみると、町人物に登場する町人たちと大いに相違し、登場する武士たちはかなり類型化されて形象化されていることが知られるのである。例えば、武官系の役職についている侍は武勇にすぐれ、あるいは、武勇にすぐれるべき者であり、それは文官系の役職の者とは異なった人物像で形象化されている。あるいは、譜代と外様、出来出頭者、などの形象化にしても多分に類型的であり、その役職の侍がその役職のゆえにもつ矛盾とか状況性とか、という点を掘下げた作品は極めて少ないものようである。この点は同時代であっても近松はちがっている。近松は例えば『鐘の権三重帷子』一篇にしても、ある地位に居る侍が、その地位のもつ状況性をドラマの葛藤に巧みに生かし関係づけて作品を創り出しているのである。これは近松が武家出身者であり、武家の内情を経験として知っていたところに由来すると考えてよいであろう。

『諸国はなし』の作者西鶴は、武家の内の生活・内証を知ることが少なかったのである。それはフィジカルな生活としての内証のみではない、メタフィジカルな心情・心理に

おいても同様であった。そうした前提に立って、西鶴の武士は、かくあるべき姿、理想像として、目録につけたコメント「義理」のみならず、その全体像としてこの一篇には描き出されているのである。(なお、西鶴は武士の内証を知ることが少ない、と私考するが、それは今日の一般の人々と比べるならば深く知っていること勿論である。念のため)挿絵はそのことを告げているように把握できる。

このように、挿絵は、作者の心情や対象理解というようなものを、我々が把握する通路ともなる。このことは、作品の内容と作者との関係を把握する通路として挿絵を考えることが可能な場合のあることを、我々に示している。

5

はじめに記したように、近世小説では作者と挿絵の筆者とが同一人である場合がある。このことは中古・近古物語や、中世お伽草子の写本類の場合にはなく、近代小説においてもまず考えなくてもよい、近世小説固有の現象である。固有の現象には、その固有性を通路にした研究の操作というものが考えうるはずである。右は、そういった近世小説の固有の現象を通路にして、文学作品の作者と作品との関係を把握してみた例である。

(むねまさ・いそお 龍谷大学教授)